

## 言語 B 必修と「情報的健康」

全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー／  
スペイン語教育研究室主任／諸言語教育研究室主任／  
外国語教育研究センター准教授 松本 旬子

インターネット上では、検索履歴や購買履歴から分析された情報が一方的に届く。便利な反面、気づかぬうちに自分の好みや類似の考え方などの情報ばかりに触れる状況に陥る。このような情報の「飽食」や「偏食」に危機感を覚える専門家らは、「情報的健康」の大切さを訴えている\*。

2020年に設立された外国語教育研究センター（以下、FLER）は、全カリの言語教育を担う。われわれ FLER の専任教員は、2024年度の言語新カリキュラムに向けて、着任時からその開発と準備を進めてきた。

本学では、全学生が母語以外の2言語を必修科目として学ぶ。多くの学生が「リングフランカ」である英語を言語 A として、6言語（独仏西中朝露）から選択した1言語を言語 B として学んでいるが、昨今言語学習においても効率化が声高に叫ばれるゆえに、われわれはとりわけ言語 B 教育の意義について議論を重ねてきた。

初習言語である言語 B を必修で1年間学んだところで英語のようにすぐに「役立つ」わけではない。では、全学生に必修科目として学ばせるのはなぜか。英語以外の言語体系とその文化圏に触れることで、未知の世界の存在を知り、想像を超える他人の行動や考え方に理解を示すことも可能になるからである。

そして、言語 B 新カリキュラムは複言語・複文化主義の視座に基づき改編されることになった。言語 B は、現在は必修科目のある6言語に加えてポルトガル語と日本手話のみであるが、今後は学べる言語も増える。

全学生に複言語・複文化主義に触れ、視野を広げる機会を提供する。それは、全学生が「情報的健康」を手に入れることにもつながっていくのではないか。言語 B 教育がデジタル情報化社会をたくましく生き抜く術にもなるならば、FLERの教員にとって、これほど喜ばしいことはない。

さて、『大学研究フォーラム』第28号では、実際の授業をさまざまな角度から取り上げ、皆さまにお届けする。どこから読み始めても「リベラルアーツ教育」の熱い現場を感じていただけるだろう。エッセーは、2022年度をもって本学を退職される先生方にご執筆いただいた。カリキュラム開発や授業運営における先生方の本学での取り組みやご経験から、教鞭をとり続けるわれわれが学ぶことは多い。これまでの先生方のご活躍に心から感謝しつつ、今後のご健勝をお祈り申し上げ、本号の巻頭言の結びとする。

まつもと じゅんこ

\* 鳥海不二夫・山本龍彦「共同提言『健全な言論プラットフォームに向けてーデジタル・ダイエット宣言 ver.1.0』」2022年1月